

インディペンデント映画の定義とは ～映画鍋主催の3つのシンポジウムより～

☆「【鍋講座 vol.13】世界の映画行政を知る②・韓国編（2013年3月23日）より多様性映画について」

2000年代半ばから、KOFICは効率的支援事業を展開していくため、「多様性映画」という用語を考案。

分類は二段階に分けられ、一次分類においては「芸術映画・独立映画・ドキュメンタリー映画、クラシック映画など」が多様性映画として選り分けられ、二次分類においては、サイズ（量的側面）と文化価値（質的側面）から定義され助成の対象となる。特に注目すべきはその質的側面で、その5つの定義は以下ようになる。

【韓国における多様性映画の5つの定義】

- ・ 芸術性や作家性を大事にする映画
- ・ 映画のスタイルが革新的であり、美的価値がある映画
- ・ 複雑なテーマを扱い、大衆が理解しがたい映画
- ・ 商業映画の外で、文化的社会的政治的 이슈を扱う映画
- ・ 他国の文化や社会に対する理解に役に立つ映画

上記、韓国の映画行政における定義を受け、また文化庁からの問いかけもあり、独立映画鍋では今の日本におけるインディペンデント映画とは何なのかを定義する必要性を感じ、議論を開始した。

☆【第18回東京フィルメックス 連携企画 『インディペンデント映画ってなんだ！？』（2017年11月18日）】でゲストと観客の間で交わされた意見。

Q <日本におけるインディペンデント映画の定義とは？>

A 作り手の実人生と切り離せない映画

低予算映画（韓国では1億円が基準となる傾向がある）

Q <もし自分が助成する側なら？ 助成作品を選ぶべきポイントを考えてみる>

A 大資本映画ではコンプライアンス的に扱えない主題を有した映画

作り手が人生をかけて撮ろうとしている映画

助成金以外からの資金調達が困難な映画

☆【シンポジウム『地域から次世代映画を考える～上映者の視点、制作者の視点』（2018/1/27）】で交わされた意見

- ・ 「労働」としてではなく、「やらなければならない仕事」として作られた映画
- ・ 長崎俊一監督曰く「誰も自主映画を作りたいのではなく、自分たちは映画を作りたいだけなんだ。自主映画と呼ばれるもので規定されるのは、内容ではなく、作り方や見せ方で定義されるものなのだ」